北海道新聞　12月1日（朝刊）

地域面から

■あんかけ焼きそば事典４年ぶり改訂

【小樽】小樽商科大の江頭進教授のゼミで学ぶ３、４年生が「小樽あんかけ焼きそば事典2017」＝写真＝を発行した。2013年発行の

事典を４年ぶりに改訂。小樽市内などであんかけ焼きそばを扱っている56店を紹介している。

13年版の発行後、あんかけ焼きそばを広めたとされる小樽の中華料理店梅月などの老舗が閉店。「誰かが記録しないと小樽の食文化が廃れると思った」という。

17年版は、ゼミ生が今年３月から半年かけて取材した成果をまとめたもので、南小樽、築港、朝里など、小樽を６エリアに分けて紹介。中華料理店にとどまらず、喫茶店やゴルフ場、温泉施設、すし屋も取り上げている。

２千部発行。Ａ５判、97㌻。486円。喜久屋書店と紀伊国屋書店の小樽店のほか、インターネット通販のアマゾンなどで販売中。

北海道新聞（釧路・根室版）１２月８日（朝刊）

「校歌」物語

釧路東高校④ 「若き命」いとおしんだ恩師

佐々木明が、スミルニッキーに「私の写真」と手渡され、大切にしている写真

釧路東高校の校歌を作詞した佐々木明(92)＝札幌市＝は小樽経済専門学校（後の小樽商科大）在学中ロシア語を教えてくれたスミルニッキーを特別な恩師と慕う。「先生のおかげで今の自分がある」と言う。

理由がある。佐々木はシベリア抑留を経て復学した後、授業の内容がさっぱり頭に入らなかった。試験も駄目。そんな佐々木をスミルニッキーはかばったらしい。

「佐々木は戦前の教育を受け、シベリアでは捕虜となった人間だ。経済がどうして分かるか。苦労してきたんだ。そういう学生は進級させなければいけない」

小樽商科大に残る資料によれば、スミルニッキーはロシア革命で祖国を去った一人。国に人生を翻弄（ほんろう）される痛みを知っている。だからだろうか。出征学徒に贈る、日の丸の寄せ書きには小さな字で「エラクナッテゲンキデカヘリナサイ」と書いた。この日の丸は現在、小樽商科大が所蔵している。

戦争で命を落とすな、元気で帰ってこいとのメッセージは、スミルニッキーが若者たちの命をいとおしんだ証しだろう。

一方、釧路東高の校歌は「若きいのち」を声に出して歌う。それは校歌の題名でもある。もっとも佐々木によれば、題名を付けたのは歌詞ができた後らしい。

「作詞後、誰が言ったか忘れましたが、ある先生から『演歌にだって題名がある。どうして校歌にタイトルがないのか』と言われ、私はこれを真面目に受け取りました。なるほどと思い題名を付けました」

佐々木が作詞した校歌は、釧路東高が唯一。平和な時代を生きる若人に向け、戦争を知る佐々木がつむいだ歌詞だ。込めた思いは、釧路東高の校舎落成記念誌（1979年10月14日発行）によると「生徒の飛躍への祈りと期待」という。万感の思いが詰まっている。

（敬称略）